

仏教における寺院の思想

前田 惠 學

仏教にとって寺院は社会にはたらきかけるためにある。仏教の寺院の構図は、仏教が社会に対してはたらきかける具体的な姿勢を示している。そこでは現実の社会の中ではたらいっている仏教の思想を読みとることができる。

本論では、スリランカ・日本・韓国の寺院を一例ずつ取りあげて比較し、そこに syncretism とか神仏習合の思想が共通して存在することを確認し、そのもつ意味について考えてみたい。

結論を先取りして言えば、これからの世界は自らの立場を自覚しつつ、必ずしも相容れない思想・信条が、互いに調和し、共生していくところに生きる道がある。仏教の寺院の構図は、その原点を示していると見られる、ということである。

I. スリランカの

Horana Rajamahaviharaya (H. R.)

Horana はスリランカ Kalutara District (県) にある町で、H. R. はこの地方有数の本山格の王立大寺院としての格式を有する。その仏殿はコーッテ (Kotte) 時代 Parakrama Bahu VII 世 (1411-1466) によって創建された。その境内は、東西に走る公道をはさんで、南側のA区画と北側のB区画に分かれる。A区画には仏塔と菩提樹があり、B区画には仏殿と神祠、講堂、布薩堂 (shala) のほか僧房などがある。

スリランカの寺院の本尊は、釈尊であるが、歴史的受容の順序に従えば、仏塔 (仏舍利を祀る)・菩提樹 (成道のシンボル)・仏殿 (座像・立像・時に涅槃像) の三種の形で礼拝所となってい

る。信徒は三か所を礼拝し、帰依の念を表明し、その教えを守つて正しく生活することを身心に表明する。巡拝しつつその心を強固にする。

仏教徒は、この巡拝によつて功德 (puṇa, merit) を得ると考えている。功德はこの世において清らかな善行を得る人格的な力である。これに対し、人生究極の目的である悟りは、現世を超えている。悟りを得るには、比丘僧の説教を聞き、五戒等の戒を守り、絶えず瞑想し禅思するのが正道である。この世では悟りは得難いが、生まれ変わつていつか次の世にそれを期待する。現世では日常生活を正しくし、週一回の精進日 (poṣa day) に参加するなど、仏教徒の務めを重ねるほかはない。

悟りは自力の修行で達成すべきものであつて、他の悟りをゆずり受けることはできない。これに対しおのれの積んだ (collect) 功德は、他に施与することができると考えられている。これを廻施とか廻向という。廻施は、多く比丘僧が在家信者に功德を施与するという形で行なわれる。病氣の子供のために比丘僧が読経するのは、その功德を廻施して、病氣の恢復を願うからである。

信者が仏陀を祀る礼拝所を巡拝すれば、それはその人の功德となる。その功德はそのままで人々の生活の上に効果があつても目には見えない。もし人が病氣やさまざまの不幸に対してまったく現実的直接的な利益を望む時には、般涅槃界に入ってしまった仏

陀ではなく、娑婆世界の内にある天界の神々に祈願しなくてはならない。

H. R. の仏殿の前には神々の祠 (devālaya) が置かれている。五つの小室に分かれ、Viṣṇu, Kataragama, Saman, Vibhīṣaṇa, Gambhara の五神が祀られている。Viṣṇu は仏教の守護神として地位を確立しているが、もとはヒンドゥー教の神、Kataragama は南インド起源の荒ぶる神である。Saman はスリー・バーダ暹山の守護神、Vibhīṣaṇa はシンハラ神で、Gambhara は村の神・土地の神である。多くの人々は自分の信ずる神をもち、病氣や不幸に際し、これらの神に直接に祈願する。神祠は寺院内ばかりでなく、日本の氏神の如く、村里に配置されることもある。神祠には人と神を仲介する神職 (kapurāṭa、在俗者で結婚している) がいる。人々は神々に供物を捧げると共に、礼拝所を巡拝し、自ら積んだ功德を廻施することが重要となる。

II. 日本の豊川閣妙厳寺 (豊川稲荷)

スリランカの上座仏教に対して中国・韓国・日本では大乘仏教が主流をなし、それも禪と念仏に集約されていく。日本の場合、仏教を代表する宗派としては禅宗と浄土真宗を挙げることが多い。ここでは便宜上、禅宗の寺院として、愛知県豊川市にある豊川閣妙厳寺をとりあげる。

寺伝によれば、本寺は一四四一年東海義易の開創で、広い境内

には法堂（本堂、本尊は千手観音）・豊川稲荷本殿・奥の院・山門・鐘楼・庫裏・寺宝館等の建築群を有する。豊川稲荷とは、義易から朔ること六代・法祖寒厳義尹（順徳天皇の第三皇子、曹洞宗の開祖道元の高弟）が入宋求法の途次、文永四年船上で白狐に跨る霊神を感得した。豊川吒枳尼真天がこれである。サンスタリットは Daitokuji で、インド密教に由来する神である。これを鎮守すなわち守り神として祀るもので、いく多の靈験を現わし、福德の神・抜苦与樂の神として広く人々に崇拝されてきた。

大乗仏教は、多くの仏を生み出した。曹洞宗では最近になって釈尊を本尊とするようになったが、もとは一定せず、妙厳寺が千手観音を本尊としても異とすることではない。曹洞宗では『観音経』を尊重しているからである。『浄土三部経』を所依とする浄土真宗では、本尊は必ず阿弥陀仏である。大乗仏教の国々において釈尊以外の仏が大きな比重を占めるにいたった理由は、大乗仏教が釈尊滅後に興起し、仏陀観が発達した結果である。それ故にスリランカのように仏殿等を巡拝して功德を積み、積んだ功德を神々に廻施するという考え方が稀薄のようである。ただ四国霊場めぐりなどでは、功德を積むということが実感されているように思われるところもある。

妙厳寺の場合、本来の法堂よりは豊川稲荷の方が有名である。吒枳尼天に現世の利益を願う。しかも吒枳尼天のみならず白狐にも信仰が集まる。民衆の多くにとっては本来の仏殿よりは、靈験

が多い鎮守の稲荷の方にかえって魅力がある。人が願がけをするお百度石もそこらにある。このように本末逆になった例はスリランカにもある。（例えば、Maharagama 等）。庶民の寺と言つてよい。

Ⅲ. 韓国・慶尚南道梁山郡 通度寺

通度寺は、入唐して戒律を伝えた僧慈蔵が善徳女王一五年（六四六年）に金剛戒壇を築き、仏舍利を安置したのに始まると言われる。海印寺・松広寺がそれぞれ法宝僧宝を表わす寺とされるのに対し、通度寺は仏宝を表わしこの三大寺刹で、仏・法・僧の三宝を代表する。現在通度寺の中心をなすのは、一連の特徴ある金剛戒壇・大雄殿と仏舍利塔である。この建築は本寺の本尊が釈尊であると共に、戒律重視の寺であることを示している。韓国の仏教は、日本の仏教が宗派仏教であるのに対し、総合仏教であると言われる。韓国の寺院には釈尊のみでなく、多くの諸仏諸菩薩を祀るのが通例である。通度寺は仏宝の寺と言われるだけあって、諸仏を祀る諸堂が多い。

一柱門・天王門をくぐると右手に極樂宝殿があつて阿弥陀仏を祀る。その奥靈山殿には釈尊の八相成道の絵像が飾られている。進んで薬師殿があつて、薬師如来に日光・月光の両菩薩が配されている。さらに二門をくぐると観音殿があつて十一面と千手の二観音が祀られ、その裏龍華殿には、弥勒、さらに大光明殿が

あつて毘盧舎那仏を祀る。また中央参道にもどれば右に開山祖堂があつて慈蔵の絵像を祀り、その奥が通度寺の中心、すなわち金剛戒壇・大雄殿・仏舍利塔の空間に到達するが、ここにも左手に冥府殿があつて地藏菩薩を祀り、奥の応真殿には釈尊を中心とする文殊・普賢の両菩薩と十六羅漢を祀る。また大方広殿の新しいお堂もできている。正に総合仏教を寺院の構図によって表わしている。いずれの信者も、己の信仰している仏や神々をいずかに見い出すことができる。

特に興味深いのは、大雄殿の奥に九龍池を距てて山神閣と三聖閣の存することである。また通度寺の入口に近い天王門の脇にある伽藍閣には土地神を祀り、不二門に近い華嚴殿には神衆壇が置かれてゐる。神衆の中でも、華嚴神衆が重んぜられた結果である。この信仰は、帝釈信仰・四天王信仰に連なる。

山神は韓国独自の民族信仰で、山岳信仰に由来する。特に山神によって有名な寺院もある。三聖閣は右に七星壇、中央に独聖壇を配している。七星はもと北斗七星に由来するもののようである。山神閣・三聖閣が大雄殿・仏舍利塔に隣接して最も奥に置かれてゐることは注目してよい。また一般に韓国寺院の諸堂で行なわれる儀式の大意については、『釈門儀範』等によって知ることができる。

韓国では、山神等が本来仏教ではないとして、これを寺院の外に排除すべきであるという議論がなされたことがあった。この種

の議論は、スリランカでも、日本でも行なわれ、純粋な仏教を好む一部の知識層には歓迎されたが、いずれの国においても、多くの場合はそのままにされた。仏教徒民衆の支持がえられないからである。現世利益を求めて祈願する人々には山神閣は重要である。

韓国においては、諸仏殿と山神閣との間に、スリランカの仏殿と神祠のようなはたらきの区別は明確でないようである。日本でもこの点は大同小異であろう。現世利益を求める人は、他の仏たちの前でも山神閣においても、大差なく現世利益を求め礼拝しているように思われる。ただ釈尊はすでに入滅して現世利益は得難く、阿弥陀仏や観音菩薩のような過去・未来・現在にわたる仏の方が頼み甲斐がある。ソウルの曹溪寺での聞き取り調査によると、七星壇では治病や延命を願ひ、山神閣では商売繁昌や家内安全を祈り、観音菩薩はすべてに効驗ありとされつつあるという。各種の縁日の中では、神衆の日が参詣者数最も多く、他の縁日の二倍ほども人が集まる。そこでは家内安全や仏教界の安泰、世界平和が願われるという。ここに庶民のこころを読みとることがができる。

以上三国の三寺院を比較して、次のように言ひうるであろう。仏教の寺院は、いずれの国においても多くの場合、本尊仏を中心とする純粋な仏教の形態の中に、これと起源を異にする神々を受容してシンクレティズムないし神仏習合と言われる形態を示している。このことは教義にもとづく僧侶中心の純粋な仏教 (Doctrinal Buddhism) と現世利益を求める民衆の仏教 (Popular

Buddhism) とが、寺院の形の中に総合されているということが意味されている。

神々は多くは直接的に民衆の幸不幸に関わり、現世利益を祈願する対象となっている。ただ、寺院にどのような神々をどのような形で受け容れるかは、歴史的・社会的な事情によることであるから、個々の場合によって異なる。民衆にひろく信仰された神々が祀られる時は、寺院の本殿よりも神殿の方が大きくなる場合もある。しかし逆に神々をすべて排除した寺院もある。ただ多くの場合、神々の信仰を受容し、調和をはかったりしなければ、民衆の支持は得難い。純粋な教義仏教だけでは、仏教の発展は難しいと考えられる。

〈参考資料〉

前田惠學「民族的エートスと仏教——日本と韓国——」(『アジア時報』1974年3月、38—47頁)。

同「韓国仏教の特質——日本仏教のそれとの対比において——」(『愛知学院大学文学部紀要』1976年、42—48頁)。

同(編著)『現代スリランカの上座仏教』(山喜房仏書林、1986年)。

同「現代スリランカにおける仏と神々——仏教の二重構造——」(『日本仏教学会年報』52号、1987年、1—14頁)。

同「仏教とは何か。仏教学いかにあるべきか」(『仏教学』36号、1994年、19—38頁)。

金漢益「韓国仏教文化における表層と基層——山神を中心として——上・下」(中外日報 24876-7号、1993年2月5日、8日付)。

洪潤植『韓国仏教儀礼の研究』(隆文館、1976年)。

金漢『韓国と日本の比較文化論』(明石書店、1994年)。

韓国仏教研究院『韓国三寺刹4通度寺』(一志社、1974年)。

鎌田茂雄『韓国古寺巡礼』(新羅編、日本放送出版協会、1991年)。

(まえだ・えがく、原始仏教・上座仏教・現代仏教、

愛知学院大学教授)